

計画・交通研究会

Association for Planning and Transportation Studies

会報 2003-07

発行日：平成15年7月10日

発行元：計画・交通研究会

〒102-0083

東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F

TEL=03-3265-1774 FAX=03-3221-5489

E-mail = easts@sa2.so-net.ne.jp

Homepage =www008.upp.so-net.ne.jp/keikaku-kotsu/

目次

Opinion	1-2
廃校の窓から	
News Letters	2-8
事業報告・活動報告	
Announcement	8-9
研究会・催事の御案内	
Backyard	9-10
事務局通信	

Opinion

廃校の窓から

谷下雅義

昨年、の正月、石川県の実家に帰省した際、父から「(両親や私の卒業した)河合谷小学校が廃校になりそうだ」という話を聞いた。既に中学校は廃校となっており、地区のシンボルがまた一つ消えてしまう可能性がある。廃校は避けられないとしてもその活用方法だけでも考えなければ、東京に戻った私は、かつて村民が禁酒をして校舎の建設費を捻出したこと、また日本各地の廃校活用事例などを集めて、自宅のホームページに公開した。そんなとき、岩手県葛巻町で「廃校再利用(もったいねえ)フォーラム」が開催されることを知り、東京から参加することにした(昨年11月)。

場所は小屋瀬小中学校上外川分校、1996年に廃校となり、現在は岩手子ども環境研究所が町と契約を結んで「森と風のがっこう」として利用している。盛岡からバスで1時間20分、さらに車で15分ほど入った山間の地にその木造校舎があった。

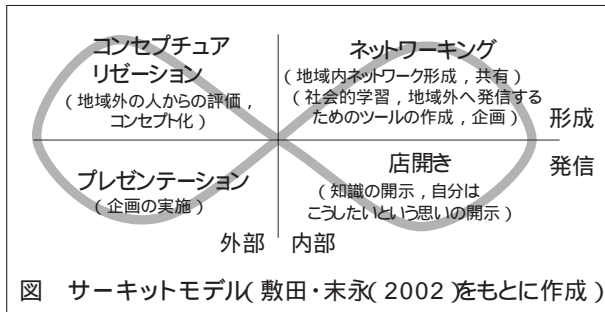
このフォーラムには北は北海道、南は愛媛から計37名が参加した。主催者である岩手子ども環境研究所の吉成さんは、子どもの教育、自然エネルギー教育などに精力的に取り組んでいる。ねおすの高木さんは、環境教育、NPOの立ち上げ、自然学校づくり(黒松内ぶなの森自然学校など)の活動を行っている。

NPO法人西和賀文化遺産伝承協会の広瀬さんは建設会社を退社して岩手に移り住み、沢内村周辺に残る古民家、結(ゆい)などの文化を継承していく活動(エコミュージアムなど)を行っている。その他、廃材を使った施設づくりなどに取り組む、くりこま高原自然学校の佐々木さん、創農コラボレーション工房・一升金を立ち上げている澤口さん、養鶏業を行いながら循環型社会に向けて活動する菅野さん、そして現在、廃校を解体せず活用しようと考えている愛媛大学生の藤井さんなど世代を超えてさまざまな経験、思いをもつ方々が集まった。

事例の報告、地元のおばあちゃん・外久保ちよさんの人生の話(婦人会、公民館活動など)、木原萩乃さんによるミニコンサート、そして廃校での宿泊。翌日、3つのグループに分かれて「外部の人が地域にどうやって入り、そして活動を展開していくか」についての議論の後、全体ワークショップ。あっという間の2日間であった(温泉も食事もおいしかった)。私がここで学んだことの一部を紹介しよう。

高木さんから、金沢工業大学の敷田先生が地域の活性化メカニズムについて「サーキットモデル」を提案されていると聞いた。この

モデルは要約すると次のようになる(図)。



店開き(知識の開示、自分はどうしたいという思いの開示)

ネットワーキング(地域内ネットワーク形成、共有)

(社会的学習、地域外へ発信するためのツールの作成、企画)

プレゼンテーション(企画の実施)

コンセプトリアリゼーション(地域外の人からの評価、コンセプトとなる)

(ルールとロール:沿岸域で自分が「何をしたいのか」「何をしてほしいと期待されているか」を学習(認識)する+新たな利用者の知識が加わる)

8の字を描くサーキット場のように情報が蓄積され、地域が活性化していくと説明する。

このフォーラムに参加して、私はこのモデルに次の2つを加えるのがよいと考えている。

- 1)レーシングカーの燃料としての「情熱」
- 2)ピットとしての「家族愛(日常生活の安

定)」「港・駅(利用者を越えた外部との情報交換)」

情熱は「したい、そしてやればできる」という信念である。またその信念は多様な価値観を認め、共感する家族あるいは外部との交流があって支えられ、そして再生する。

その他、「外からきた人を風の人、地元の人を土の人という。風と土が一緒になって何かを創り出す。」「(吉成さんが非常勤講師を行っている)東京の大学生が講義では全然やる気を見せなかったが、実習ではとてもいきいきとしていた。」そして「学校は未来を映す窓である。」など廃校に泊まって学んだことは社会資本整備と通じることも多かった。なお、河合谷小学校は「特別認定校」に指定され、町南部の新興住宅地などから6人が転入し、全校児童10人で存続している。また先日森とかぜのがっこうは文部科学省「廃校リニューアル50選」に選ばれた。

参考文献

敷田麻実・末永聡(2002(「地域の開放と持続可能性を両立する地域創造モデルの提案 京都府網野町琴引浜のケーススタディからの分析」漁業経済学会第49回大会報告要旨集, 9

URL:岩手子ども環境研究所 <http://www5d.biglobe.ne.jp/morikaze>

津幡町立河合谷小学校 <http://www.ishikawa-c.ed.jp/kawate/>

(計画・交通研究会 正会員/中央大学 助教授)

News Letters

事業報告・活動報告

2003年5月定例研究会

日時:平成15年5月12日(月)16:00~18:00

場所:計画・交通研究会会議室

テーマ:「アメリカ・シカゴにおけるPI-イリノイ大学による取り組み事例報告-」

(Developing a Plan from Bottom Up: A Case Study of Public Involvement)

講師:イリノイ州立大学都市交通研究センター
助教授 河村 和哉 先生

司会:東京商船大学

助教授 兵藤 哲朗 先生

内容:わが国でもここ数年、多くのプロジェクトでパブリックインボルブメント(PI)の重要性が認識され、その試みがなされつつある。現代のPIの源流は無論、アメリカにあるといえる。本講演では、イリノイ州シカゴ近郊のOak Park町でイリノイ大学のスタッフや学生が中心となり実施されたPIの事例が紹介

された。Oak Park町は、大学関係者らが多くすむ地域であり、そもそもこのプロジェクトが発足したきっかけも、行政と大学スタッフとの個人的な会話が始まりであった。ゆえに、大学スタッフにとっても身近なテーマであり、半ばボランティアとしてPI活動に関わってきた。PIの具体的な方法としては、学生によるビジュアルなITを用いたプレゼンテーションツールを用いた方法も採用され、合意形成に大きな効果を発揮した。中立的な大学研究者らが関わった事例として、わが国にも大いに参考になる試みであるといえる。

なお、講師の河村先生は、高校時代に交換留学生として渡米後、カリフォルニア大学バークレー校で修士号を取得し、5年間の米国内の交通コンサルタント会社勤務後、再びバークレー校に戻り博士号を取得され、現職に就かれた。交通計画の研究はもとより、実務者の立場からもアメリカの交通計画に対して幅広い知見をお持ちであり、本講演でも標記



河村和哉先生



5月定例会 多勢の聴講者

PI事例に限らず、アメリカ交通計画事情全般にわたる様々な意見交換がなされたことを付記しておく。

2003年5月 計交研・当て塾共催セミナー (第 講・第2回)

日時：平成15年5月14日(水)17:00~19:00

場所：計画・交通研究会会議室

講師：「当て塾」塾長 鈴木 忠義

演題：第1章 人はなぜ旅をするのか(その1)

第 講・第2回の共催セミナーは、計画・交通研究会関係8名、「当て塾」関係14名(塾長を含む)計22名であった。

今回は、観光原論の第1章「人はなぜ旅をするのか」(その1)についてで、人間の長い歴史の中から学ぶこと、人間の本質から捉えることの重要性が解説された。

【講演概要】

1. 汎^{はん}観光の意味論はなにか(課題-1)

観光という言葉には様々な内容が含まれるが、ここでは、余暇活動の全般にわたる広い意味合いが含まれることを明示的に表すために「観光」という言葉を用いる。「汎^{はん}」とは、あまねくわたる、全てという意味で、英語などのpan-の訳として使われるものである。

「人は“意味”を糧として生きている動物である」(菅野盾樹著：「意味、哲学の木」p.76、講談社、2002.3.11)と言われるように、意味論が非常に大切である。観光原論を始めるにあたって、汎^{はん}観光の意味論を考究する必要がある。

2. 生命維持 - 生得説(課題-2)

生きものは、摂取(Input)と排泄(Output)の過程で体内にエネルギーを貯え、様々な活動を行う(鈴木忠義著：「人間に学ぶまちづくり」p.43・図-6参照)。文明を持った生きものである人と社会との関係も同様で、社会から様々なものをInputして社会へOutputする。

社会へのOutput(物事への反応)は $Y = aX$

という単純な方程式で表される（養老孟司著：「バカの壁」、新潮新書、2003.3）。ここで、係数 a （+・-がある）は人によって異なり、関心が高い人ほど値（絶対値）が大きくなる。

このような人と環境との関係から、旅をする理由の生得説が考えられる。複数の冒険家を調べたところ、好奇心に関連する遺伝子が見つかったことも、生得説につながると考えられる。

3. 人間の成長と欲求の変化

- 汎観光との関係（課題 - 3）

マズローの欲求の段階説（鈴木忠義著：「人間に学ぶまちづくり」p.20・図 - 5参照）に示されるように、人間の最初の欲求は生きるためのものであるが、成長すると欲求は高度になり、「自己実現の欲求」「自己超越の欲求」を持つ。その典型が美意識である。この点から、美しく感動的なものを観るといふ観光は、人間の高次の欲求の一つと言える。

まちづくり = 観光地づくりにおいては、人間が求めているものが何であるか知る必要がある。“国の光りを観る”のが観光であるから、いい町、美しい町でなければ人は来ない。

4. 考古学、人類学、文化人類学と汎観光

（課題 - 4）

人は、農耕を始めるまでは、採集・狩猟・漁労などを行いながら歩き回っていた。この回遊・採集の行動は、山菜取りや潮干狩り、



鈴木忠義先生

空港の土産品売場を巡る行動などとして現代人にも残されている。このような行動は、発見、創造、達成の喜びや満足感をあじわうなど好奇心によるもので、人間の歴史を築いてきた原動力となっている（鈴木忠義著：「人間に学ぶまちづくり」p.53・図 - 9参照）。

母の鼓動、昼夜、四季など多くのリズム現象が人間を取り囲んでいる。農耕社会では、陰暦による労働歴・余暇歴のなかで多彩な文明と文化の諸活動が展開されてきた。そうした中から芸術が生まれてきたのである。

このように、人間の長い歴史の考察によって汎観光の多くの要素を理解することができる。例えば、熊野古道など聖域として守られてきた観光資源を知ることなど、人間と歴史を勉強しなければ観光資源論は語れない。

人間の長い歴史は、考古学、人類学、文化人類学などで研究されており、汎観光についてもこれらの学問から多くを学ぶ必要がある。

（文責：「当て塾」東京事務局 野倉 淳）

2003年5月 計交研・当て塾共催セミナー （第 講・第3回）

日時：平成15年5月28日（水）17:00～19:00

場所：計画・交通研究会会議室

講師：「当て塾」塾長 鈴木 忠義

演題：第1章 人はなぜ旅をするのか（その2）

第2章 日本の旅人・世界の旅人

- 予講と文献そのフォーマット

第 講・第3回の共催セミナーは、計画・交通研究会関係6名、「当て塾」関係15名（塾長を含む）計21名であった。

今回は、前半に「第2章 日本の旅人・世界の旅人」の予講が行われ、後半が「第1章 人はなぜ旅をするのか」のその2として、日本女子大学の関根康正教授（文化人類学）を迎えての討論であった。

【講演概要】

第2章 日本の旅人・世界の旅人 - 予講

観光原論の第2章は、日本と世界の著名な旅人に関する文献を整理し現代の旅行とつな

ぎ合わせることで、汎観光の基本事項を整理するもので、基本的な枠組みは以下のようである。

1. ねらい

第2章は、「旅 - 旅行 - 観光 - レジャー」などの意味を考え、汎観光の概念を確立することがねらいである。

2. フェイスシート

日本人と外国人の著名な旅人をリストアップし、次ぎのような内容のフェイスシートを整理する。10人位ずつ整理すれば、かなりのものが見えてくると思われる。

氏名、出生地（国籍、旧・新）、生没年、
旅行時の年齢（ 歳 ~ 歳）、旅行当時の職業、
役職、身分、家族、住居、その他

3. 求める調査結果

旅人が行った旅については、次のような事項を整理する。

動機、旅の内容、アウトプット（作家、画家...）
行動範囲、空間、態様、逗留、宿泊、期間、
仲間、連れ、路銀、出会い、その他

ここで、アウトプットは、旅先で真剣にものを観て何らかの成果を出すことですが、現代の一般人の観光旅行ではあまりみられない。

4. まとめ

フェイスシートと調査結果をデータとして、次のような取りまとめを行う。

ねらいの裏付け

動機付けにおける旅人相互の関連及びその時のメディア（文書、遺品、訪問...）



関根康正先生

（例：能因法師 - 西行 - 芭蕉）

現代旅行における主要項目とのチェック
〔文献のフォーマット〕

汎観光に関する文献を整理するフォーマットとして、大・中・小の分類項目（1桁から4桁の分類番号）、著者・書名等のリスト様式、整理カードの例などが紹介された。

第1章（その2） - 討論

文化人類学がご専門の関根教授を迎えて、「第1章 人はなぜ旅をするのか」についての討論が行われた。関根先生からインドの調査研究を交えた以下のようなお話しがあった。（鈴木先生の“人が旅するのは本性によるものか”という問いかけに対して）

かつて人類が流浪を捨て定住に入った時代の議論に遡って考えることは、「現在学」の文化人類学によくなすところではないが、むしろポストモダンと言われる今日、移動が支配的な生活が再来しているのではないかと問うことは問題に迫る一つのアプローチになるだろう。このグローバル化する近年の世界の動向を理解するために、プレイスにスペースを対比させる見方とある意味決別し、プレイスが座標の点に縮減されたところで可能になる移動する主体が構築する「物語的空間」を扱うことが必要になっている。同様に、移動を前提にした空間論には、ノン・プレイス（非・場）の考え方（オジェ）やヘテロトピア（フーコー）などがある。そうした説明が始まっているように、再び人が旅することを必然とするような生活が、科学技術革命、情報革命の後に到来しているように思われる。

「なぜ」と一挙に問うことはかなり高度な技なので、ひとまず「どこへ」旅するかと問いの水準を下げてみると、考えやすくなるかも知れないと思われる。旅の目的地は何らかの意味で「魅力」のある所である。その魅力のなかでも、宗教が最も究極のものだろう。インドの巡礼地はまさにその一つの典型を示し、それは究極の観光行為かも知れない。

もちろん、無目的の旅というものも考えな

いといけないだろう。目的地や理由の定かでない、未知の探求、ロマンの追求なども検討対象となろう。俗っぽい理由から、聖なる理由まで含めて、旅という行為は、人に「存在証明」を与えているのではなかろうか。

インドの巡礼の旅には、その目的の一つに病氣治しの願掛けがある。日常の定住社会ではカーストや宗教などの区分、差異が眼をひくが、病氣という苦悩の前では、つまり巡礼の旅ではそうした差異の垣根は低くなって平等的で融通性の高い状況が現出する。ここまで降りると、どの宗教もその根幹的基礎のところまで似たものとなる。実際、たとえばキリスト教の聖地に大勢のヒンドゥー教徒が救いを求めて参詣する。これは普通に見られる光景である。その意味で、大きな寺院に定住し、敷居や垣根の高くした「神」よりも、浮遊しどこにでも出没する垣根の低い「カミ」の方が、人々にとっては広々とした世界を示してくれる。

なぜ旅をするか、と問うやりかたとして、一つ逆説的なやり方を試みるのはどうだろうか。それは、あえて逆に「旅をしない人」を考えてみることである。最近知ったのだが、シカゴで暮らしたヘンリー・ダーガーという自分の部屋でほとんど一生暮らした人がいた。その人の死後に部屋からは膨大な数の絵と長大な物語が発見された。身体的には移動をしなかった人であったが、その絵画や文章の世界に見るように、彼はイメージーションの世界で旅をしていたのではないだろうか。この「内なる」旅は、彼自身の「存在証明」となっていたと思われるが、特に惹かれるのは、他者という人間を介在させないその存在証明のあり方である。これは凡庸ではない。

直接今回のテーマには関わらないかも知れないが、官僚制の研究は今日非常なる緊急性と重要性をもっていることを指摘したい。近代の産み出した官僚制は、旅の思考に対立する定住的思考の典型であり、それが今日、さまざまな場面で社会に改革を阻む壁になっているからである。その存在のあり方が示す矛

盾が、スーパーモダニティが論じられる時代とのズレをますます露わにして、問題化してきている。人類学のみならず、多声的な形で、官僚制批判が真剣に展開されなければならないのである。

(関根先生の部分は、一部に当日話されなかったことも付加されている。)

(文責:「当て塾」東京事務局 野倉 淳)

2003年6月 計交研・当て塾共催セミナー (第 講・第4回)

日時:平成15年6月11日(水)17:00~19:00

場所:計画・交通研究会会議室

講師:「当て塾」塾長 鈴木 忠義

演題:第2章 日本の旅人・世界の旅人(その2)

第 講・第4回の共催セミナーは、計画・交通研究会関係4名、「当て塾」関係13名(塾長を含む)計17名であった。

今回は、前回の予講を踏まえて、旅人の系譜を探る視点について解説され、続いて、旅や旅人に関する文献が紹介された。

【講演概要】

1. 旅人の系譜をさぐる試み

芭蕉(1644~1694)は西行(1118~1190)に憧れて旅をしている。その西行は能因(988~?)に影響を受けている。しかし、この3人が生きた時代は重ならない。能因から西行までが数十年、西行から芭蕉までは450年以上の隔たりがある。

このように、代表的な旅人について、生没年と旅をした年を踏まえた系譜(次から次へと影響を受けて来た物事の間に見られるつながり)を整理すると、様々なものがみえてくる。

旅人は歌人・俳人、その作品がメディアに芭蕉や西行らは歌人・俳人と呼ばれる人達であり、時代を超えたつながりは、短歌・俳句という優れた文学の伝承による。現代のような情報伝達手段がない時代にあって、短歌や俳句は短くて写しやすく、伝わりやすかったと言える。その結果、時代の隔たりがあっても、現代風に言えば“観光メディア”とし

て有効に機能したと考えられる。

旅の意味づけ、モチベーションを探る

旅の行き先をみると、北陸、東北など気候の厳しい場所を訪れている。あるいは、日本海の夏はベタ波であるから、その時期と場所が選ばれていることもある。

いずれにしても、現代の観光旅行のように、気候の良い時期に美しい自然を求めてといった単純なものではないようである。例えば、東大寺の大仏に張られていた金箔は東北産の金を利用しており、東北が馬の産地であることなどから、東北の何らかの資源を求めて旅をしたとも考えられる。

旅人の時間と空間、テーマ等を限定した研究旅人の系譜にみられるような時間や空間の広がりや一度に扱うことは困難であり、時代や地域などを限定して研究する。

また、旅の動機、内容、手段などのテーマについても、幾つかに限定する必要がある。

ねらいは観光ビジネスの体系化

以上の旅人に関する研究は、旅人そのものを探ることが目的ではなく、彼らの旅を支えた人や仕組み、情報などを対象として、当時の旅行を現代と対比しながら、観光ビジネスにつながる学と術を考えることが目的である。言い換えれば、旅人という消費者ではなく、供給サイドを考えるもので、成功する観光ビジネスの体系化を目指す。

超一級の資源である上高地や尾瀬などは、多くの人々が入り込み、自然が失われつつある。これが現在の日本の観光ビジネスのレベルなのである。一層の国際化が進展するなか、この観光ビジネスの質を高めることが急務である。

これに関連して、本格的な観光のビジネスマンがいらないのも現状である。旅人を研究すると同様に、ビジネスマン(ホテル、鉄道、観光施設等)について探ってみても良いだろう。

2. 文献リスト

旅や旅人に関する文献が紹介された。(講義資料の文献 - 2、文献 - 7~11を参照)こ

れらの文献には、文学、地理学、民俗学、文化人類学などの系統がある。

旅という言葉には魅力があり、文学系の作家たちも旅の本を多く出しており、よく売れている。これに対して“観光”という言葉はあまり出てこない。

(文責:「当て塾」東京事務局 野倉 淳)

2003年6月 計交研・当て塾共催セミナー (第 講・第5回)

日時:平成15年4月23日(水)17:00~19:00

場所:計画・交通研究会会議室

講師:「当て塾」塾長 鈴木 忠義

演題:第2章 日本の旅人・世界の旅人(その2)

第3章 旅と観光(その1)

第 講・第5回の共催セミナーは、計画・交通研究会関係5名、「当て塾」関係13名(塾長を含む)計18名であった。

今回は、「第2章 日本の旅人・世界の旅人」のつづきとして文芸雑誌における旅の特集が紹介され、「第3章 旅と観光」の予講として戦後間もなくの観光への取り組みが紹介された。

【講演概要】

1. 文芸にみる旅

文学は、人がどのような行動をしているのか、人間とは何者かを考える分野である。(理学は物と物との関係)一方、旅には発見があり、刺激を受け、新しい自分を見出すことができる。そのため、多くの作家が旅を好み、多くの作品で旅が題材となっている。こうした旅を扱った文芸の例として、下記の5つの文芸雑誌等の特集が紹介された。(講義資料P.17~P.22を参照)

これら文芸では、旅や移動することの魅力や旅人の心境などが語られており、こうした中から、旅に関する一般解を見出す必要がある。

また、文芸における旅は第一主体である旅人が中心であるが、第二主体の旅先(地域)や、第三主体の産業(観光ビジネス)について検討していくことが重要である。

「國文學」・1975年11月臨時増刊号(學燈社)
「対談：池田弥三郎・水上勉 - 旅と旅人」
に始まり、「 ．国内の旅」、「 ．異国への旅」、「 ．想像の世界への旅」の3部構成で、文学作品の作者や描かれた人物、詩人などの旅がまとめられている。国内の旅は、さらに、流離の旅、廻国・遍路の旅、上京の旅・帰郷の旅、さまざまな旅、詩人たちの旅に分けられている。

「旅」・昭和1977年1月号(日本交通公社)
「100人の旅びとを選ぶ」

古代から現代の5つの時代区分により、古代は神武天皇から西行までの16人、中世は文覚から道興までの9人、近世は天正ローマ使節から福沢諭吉までの35人、近代は笹森儀助から尾崎喜八までの30人、現代は今西錦司から植村直己までの10人を選んでいる。

「國文學」・1980年6月号(學燈社)

特集・旅の発見 - 異国のなかの日本人

「西欧・アジア・想像力」と題した対談のほか、「近代作家の異国体験」、「異国での思いとことばと」、「異国のなかの日本人」、「作家・作品に縁の異国の街々を訪ねて」といった構成で、文学作品と作家を紹介している。

「人生読本 - 旅」・1980年(河出書房新社)

東山魁夷、柳田国男、小松左京、寺山修司、五木寛之など50名近くの著名な作家・画家・芸能人などが旅について執筆している。

「日本の美学」創刊号・1984年(ペリかん社)

雑誌の創刊号に旅の特集が組まれ、「旅と美意識」、「道行の美学」、「西行と旅」、「絵の旅・旅の絵」の4編が掲載されている。

2. 旅から観光へ(「第3章の予講として」)

第二次世界大戦の戦後復興の中で、観光は経済復興の重要な位置づけにあった。その一例として、東京都による「観光講座講義集」が紹介された。(講義資料P.23~P.24を参照)

この時期の観光振興は、外貨獲得を主目的とした“途上国型観光開発”であった。半世紀を経過した現在にあっても、国民のための観光政策が十分でないことは残念である。

「観光読本」(第二回観光講座講義集)

(東京都建設局公園観光課編 1949年10月)

国、大学、民間から最高レベルの講師を招いた本格的な講座であった。

(1) 総論(石坂泰三、平山孝)、(2) 観光事業の理論(木村三郎、間島大治郎、佐藤健輔、上原敬二)、(3) 観光事業の経営(林謙一、犬丸徹三、栗田正四郎、齋藤信治、佐藤武夫)、(4) 国際観光の一般(横田巖、鈴木文史郎、吉村侃、中村孝也、岸衛)

3. 文献リスト

体系「17観光学の体系」に関する文献が紹介された。(講義資料の文献17-1~17-3を参照)

(文責:「当て塾」東京事務局 野倉 淳)

Announcement

研究会・催事の御案内

2003年9月那須地域視察旅行と定例研究会
詳細は同封別紙参照

日時：平成15年9月19日(金)~9月20日(土)

費用：自己負担分 8,000円「ホテル宿泊・食事代金」

集合：新幹線那須塩原駅改札前

9月19日(金)10:10厳守

参考；なすの233号 東京発8:44 - 上野

8:50 - 那須塩原 - 10:06

切符は往復とも各自ご購入ください。

(自由席でも空席があると思います)

行程：

9月19日(金)

那須塩原発10:15「貸切バスにて」

那須野が原公園・サンサンタワー

いまどき、こんなところがあるのか？

芦野 石の美術館
庭と館の世界のデザイン賞受賞
余笹川 工事現場
未曾有の洪水とユニークな復旧（現地担当者の解説）
サンノブル別荘開発
優良な別荘開発
道の駅「明治の森」・青木邸
国指定文化財・明治の元勲 青木周三邸、ヒバの並木が圧巻
ホテルサンバレー那須着17:00頃
那須で一番元気なホテル。飲み放題・食
い放題にご期待を。温泉プールあり。
水着用意。
夕食時：討論会を実施
9月20日（土）
8:00 - 8:30 朝食 朝食後部屋を空けて
会議室へ移動願います
9:00 - 11:00 ホテル会議室にて
【定例研究会】
テーマ「人間に学ぶまちづくり」
まちに住むのは人間。動物でも機械でも、
コンピュータでもない。しかし現実には、誰
のためのまちづくりか分からないまちづくり
が行われてきた。人間が住むまちをつくるに
はどうしたらいいのか。あたりまえのことだ

がクライアントである人間に、人間の本質に、
学ぶほかない。

講師：鈴木忠義 先生

テキスト：「人間に学ぶまちづくり」鈴木忠義
著 A5 - 131PP、図 - 16、カラ
ー写真 - 95、平成15年3月（社）
九州建設弘済会発行 1,000円
本書は、国土交通省九州地方整備
局「スキルアップセミナー」の講演
録を中心にまとめたもの。当日出
席者（1社一部）に無料配布予定。

11:00 ホテル発

11:30 地方の元気な遊園地 リンドウ湖
ファミリー牧場。民事再生法で
「あて塾」も協力。

15:00頃 黒磯駅にて解散

2003年7 - 9月「当て塾」との共催セミナー

第 講 観光の学と術の研究開発に向けて

7月 9日（水）第3章 旅と観光

7月23日（水）第4章 観光の意義と役割

9月10日（水）第5章 - 1 観光行動論 - 1

9月24日（水）第5章 - 2 観光行動論 - 2

時間・場所：17:00～19:00 / 計画・交通
研究会会議室

講師：「当て塾」塾長 鈴木忠義先生ほか

Backyard

事務局通信

会議室等の御利用について

当研究会の会議室、応接室をご利用下さい。
定例研究会や個別研究会の開催時以外は部
屋が空いています。会員の皆様はお気軽にご
利用下さい。個別研究会等で会議室を御利用
になる場合は、取りあえずお電話を下さい。

会議用にはOHP、スライド（Kodak）、液晶
プロジェクター（APTi）が有ります。

個別に利用できるデスクがあります。貸し
出し用ノート型パソコン（IBM Think Pad）、
FAX、電話、コピー、E-mailもご利用いた

けます。

なお、会議室は現在利用率が非常に低い状
況にあります。どうぞ、お気軽に御利用くだ
さい。（別途ホームページにて部屋の空き状況
がわかり、申込みも容易にできるようなシス
テムを検討中）

個別懇談会のお申し込み

会員各位個別の研究やプロジェクト等につ
きまして、当会のフェロー会員・個人会員（地
域的にも研究部門の面でも多彩な教授・助教

授がおられます。既送の会員名簿を御参照下さい)が個別に御相談・懇談に応じます。ご希望により日時を調整しますので、事務局まで遠慮なくご相談下さい。出来れば具体的な研究課題・プロジェクト内容と、希望されるフェロー会員・個人会員のお名前をご連絡下さい。

原稿の募集

会報に掲載する下記の原稿を募集します。

- ・ **Publication/Documents** : 刊行物・文献資料。
- ・ **Announcement** : 研究会・催事の御案内
会員による講演会等の御案内も随時掲載します。日時・会場・事務局等を明記願います。
- ・ **Report** : 報告
海外研修報告、国際会議参加報告等

原稿執筆上のご注意

原稿のテキストファイルを電子メール(推奨。本文挿入または添付ファイルで)あるいは3.5インチのフロッピーディスクでお送り下さい。ワードプロセッサを使用される場合は、MS-Word形式もしくは一太郎形式で文書ファイルを保存して下さいようお願いいたします。

編集の都合上、400字を1単位としてその整数倍(上限4単位=1ページ分:表題・図表を含む)になるように調整して下さい。2ページ以上に及ぶ場合は御相談下さい。

写真を使用される場合は、プリントされたものを郵送願います。

締め切りは偶数月の15日(必着)です。

事務局夏休み

誠に勝手ながら8月9日(土)から8月17日(日)の間、夏休みとして事務局を閉鎖させていただきます。

計画・交通研究会

会長	中村 英夫
副会長	黒川 洸
副会長	森地 茂
事務局長	窪田 陽一
会報編集委員長	天野 光一
会報編集責任者	橋本 昭夫

〒102-0083

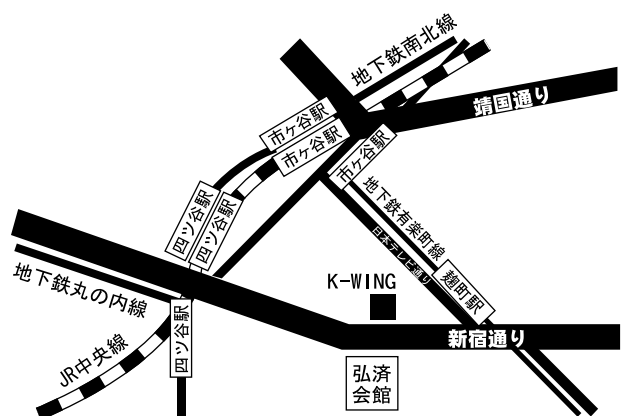
東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F

TEL=03-3265-1774

FAX=03-3221-5489

E-mail = easts@sa2.so-net.ne.jp

Homepage = <http://www008.upp.so-net.ne.jp/keikaku-kotsu/>



計画・交通研究会案内図

交通

JR中央線四谷駅下車徒歩5分 / 営団地下鉄丸の内線四ツ谷駅下車徒歩5分 / 営団地下鉄南北線四ツ谷駅下車徒歩6分 / 営団地下鉄有楽町線麹町駅下車徒歩4分